楊心流家系と「当て身、生かし」の理論及び医術について

――楊心流研究（其の四）――

長谷川　哲郎

大分県を中心として調査した楊心流についてさきの稿で紹介したが、この稿ではその内容について分析整理を試みた。この稿を作成するのに用いた文献、伝書及びそれ等の所在、所有者等については、前稿で詳細に紹介したので、この稿ではその事については省略する。

楊心流の内容を大別すると、

1　序　流儀の発生事情（家系）。

2　武術としての兵法、武技に関すること。

3　「当て身、生かし」の理論、及びその理論付けとしての医術（人体内臓観）に関すること。

4　天地、身体の陰陽の概念をもとにした「易法」に関すること。

以上四つの面から構成されている。而しこれ等夫々の分野が夫々独立した形で表現記述されているのではなく、夫々の理論は互に関連し合い、武術理論としての統一目標で統合されている。従って理解し易くする為のこの分析整理の作業は、かえって整理のための整理に過ぎ夫々の関連をこわし過ぎる結果になる恐れを感じている。原文は伝書の性格上作為、無作為の陰語、古文字、当て字、誤字、草書のつゞけ字、記述上の重復、話し言葉の片仮名書き表現等で判読に難渋した。判読に当たって大

分東高等学校高橋哲先生の御指導に負う所が多かった。改めて謝意を表します。この稿は

1　序　流儀の発生事情（家系）と

2　「当て身、活かし」の理論、及びその理論付けとしての医術（人体内臓観）に関することについて、

の整理を紹介し、武術としての兵法、武技に関すること。及び天地、身体の陰陽の概念をもとにした「易法」に関すること、については稿を改めて紹介することにする。

第一章　楊心流の発生事情（楊心流家系）

夫れ以って胴を釈くの根元は、古、魏の人武管医術において名有り、天下の人の難病を救う事神の如し。然りといへども急切に臨んで医薬も施すこと能はざる処あり、その時に臨んで武家の兵法を以ってこれを救う妙術なり。急病によって悶絶し、金瘡によって気絶す、又あるいは種々の横死横難を救抜するの仁術なり。管君唐土においてこの法を修学し、来って本朝に相伝へ、もって天下後世の重宝と為さんと欲す。是を以って今や楊心流の家系と為す者なり。

この胴釈の妙理を修学し来って、上檀において死蘇の法を伝授するといえども、必ずしも未だ可なりと為さず、見、師に等しきは師の半徳を減ず、見、師に過ぎて正に伝授するに堪えたり。あゝこの一件小事に非ず。欽ずべし欽ずべし。

実に秘事は睫の如し。世人能く泰山を見、睫を見ることあたわず。百尺の竿頭に一歩を進むる、底田の地に到って、まさに始めて権柄手に在って殺活時に臨むべし。学ぶ者それ容易に看を為すことなかれ。一段の大事に到る者、一子相伝の外必ずこれを伝えざる者なり。世に躰術柔術と称する者数十家ありといえども皆般々の輩のみ。蝦蜆、螺ぼう問うに足らず、胴釈の伝授はあゝそれ難きかな。

第二章　「当て身、生かし」の理論及びその理論付けとしての医術（人体内臓観）に関すること

一　当て身（殺法）

註　寸尺の伝（当たりの所を口伝するをいう）ともいうなり。

1　松風の殺（当たり）

松風の殺（三時の殺ともいうなり）は喉の当たりにして陽の位なり。

2　陰雨の殺（当たり）

陰雨の殺は松風と同じく喉の当たりにして陰の位なり。

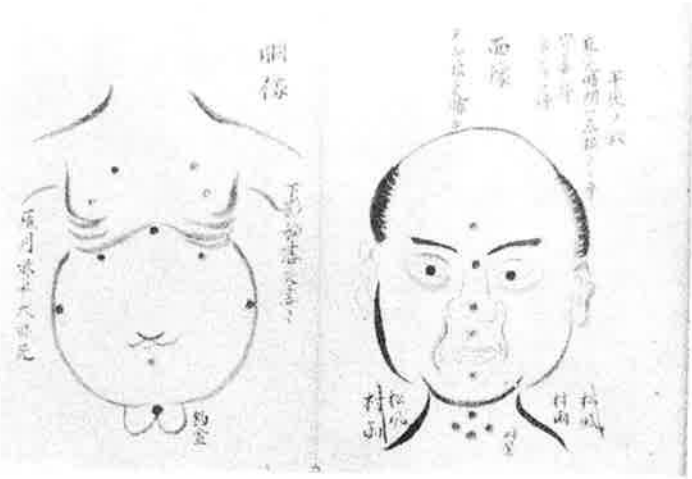
3　電の殺（稲妻の当たり）

電の殺は膽の腑に当たる陰陽の位にして、この殺は速かなる故稲妻の当たりともいう。

4　月影の殺（当たり）

月影の殺は肝に当たる所なり。月影は膽、肝の辺に近く最も繁く経に当たるときは、経力持つ事難し。故に思の外に吐息を出し真死に及ぶことあり。息絶って表裏の経絡を絶つとき蘇生する事難し。常に必ずしも当てぬ事なり。

（口伝）軽きは生き、強きは生きず、極々むつかしき当たりなり。



5　雁下の殺（心の臓の当たり）

雁下、照息の殺を半時の殺ともいうなり。雁下の殺は両乳の辺に当たる事なり。この経は心肝の二つに近き所なり。この地少しの当りにても大いに傷む所則天真の気の至る所最大事の殺なり。

6　明星の殺（当たり）

明星の殺は大腸、膀胱の二腑に当たる所なり。明星に当たる時は二便おぼえず浸み出るなり。

7　水月の殺（当たり）

水月はこの流極意大事の殺なり。一切の臓腑の経絡の分かるゝ所にして脾の下、胃の上に当たる神父の腑の殺なり。即息絶えて少しの間臓腑に性息止まるも、みる内に空の如くなり死するなり。この水月は活生はなし、先師も致さゞる所心慎むべし。

8　烏兎の当たり（眼前の当たりともいう）

烏兎の当たりは両眼なり。頭の圓なることは天に同じ。故に天に日月ありて陰陽分る、人に両眼あって事物明白なり。この流に両眼を指して烏兎というは、日中に三足の烏あり。月中に玉兎ありて見る、これ陰陽なり故に烏兎という。

註　（死活口伝）

(イ)　手（拳）にて当て様のこと

当つるに寸尺（急所）にて定穴極まるなり。こぶし手で突くがよきなり。（こぶしに口伝あり）

(ロ)　足にて蹴様のこと

左に当つるときは我が左の足を右もゝにあげて、それより蹴り当つるなり。（足指先に口伝あり）

(ハ)　稲妻目当てのこと

人大小によらず目当て定るべし。（目当てに口伝あり）

㈡　水月目当てのこと

帯の上端より寸法をとる。（寸法に口伝あり）

㈢　人中目当てのこと

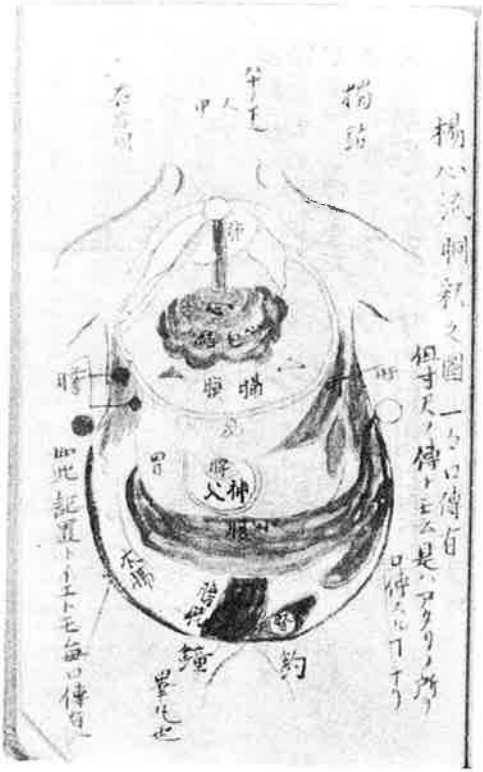
虎の一天ともいうなり、道具にて当たる時は即死するなり。

二　胴釈門（人体解剖）に関すること

天地人胴釈の理は人間の五臓六腑、骨、筋肉を寸尺として以って禁穴清穴を知るべし。

1　咽喉の腑

この経は気の往来する所の道路なり。胴体の上胸、咽喉の部に二管あり、一つは水穀の道路なり。他の一つに息管というものあり。一尺二寸九節ありて肺の臓に経続するものなり。この裏に十二律備わり人間の声韻はこの肺より出るなり、味は辛を好むなり。



2　胃の腑

咽喉の管は胃に通経して水穀の道路なり。飲食すべて胃に納む、胃の腑は脾の下に従って位して居るなり。水穀の納むる所を上脘といゝ、臍の上五寸水穀の消化をする胃の正中を中脘という。臍の上四寸食物腐熟して小腸に伝わる所を幽門という。臍の上二寸を下脘と言い小腸の上口なり。

3　膽の腑

膽は肝の四葉の間に埋もれて肝とは別なるものなり。胃は水穀を入れ、小腸はこれを受け、膀胱は液を受け、大腸は糟粕を受く。五腑は何れも気の益を受けず、膽ばかり離れて水穀の穢濁を受けず、肝葉の間に在ってその精気天気を持って守るものなり。人間形躰の気、柔剛すべて膽より出でざるはなし。これによって人間の剛柔の気は膽の致し司る所なり。

4　肝の腑

肝の形は木の葉の如し七葉あり。四葉は右につき三葉は左につき、すべて人間の剛柔の出る所なり。

5　心の臓の腑

心、肝の二つは上位に位して下腹の穢濁の気を受けず、関する所の経は両方各一寸の間にあり。第一心の臓に当たると知るべし。心の臓は肺中にあって上位なり。膈膜というもの覆うてあり。故に心肺の二つは水穀の穢気を受けざるなり。五臓の中において心の臓は至誠君主の位、神明の寓する所一身の神霊なり。他の臓腑はこの心の臓より達経するものなり。

6　大腸、膀胱の腑

臍上一寸ほどこれより水は膀胱に下行し雪陰へ出る。糟粕は大腸へ行って肛門に出る。大腸は右に位して居り後へ蟠りあるなり。膀胱は大腸に入りくみて前に蟠居する所は陰灰の地と知るべし。

7　神父の腑

脾と胃の中下神父という腑あり。これは腎心の性を受けたる気経をかたどって生腑なり。常にこの腑は萬風を生ずるなり。

則息絶えて少しの間臓腑に気止まるも見る内に空の如くなる腑なり。

三　活法（生かし）

註　性息とは身体の健康な状態、又生くる状態をいう。

七ヶ所の活かし

1　松風の当たり性息（生かし）の大事

松風の当たりにて息（陽経）止むときは、前豁（胸）第一椎（第一肋骨）に大事あり。生かしは肩より乳の上にかけ、なで下し生かすなり。此方の左の手を肩にかけ、右の手で病人の胸えりをとり起し、左に廻り背をもみ、二三べん叩き右へ廻り寝するなり。

（口伝）　口中、舌の上、手足の腹に塩を置き、そのまゝにて、右の活を入るゝなり。

2　村雨の当たり性息（生かし）の大事

村雨の生かしは右松風の通りなり。陰陽のちがいなり。松風は陽の生かしにして昼用ゆるなり。村雨は陰の生かしにして夜用ゆるなり。

小児には五の椎（第五背椎）のこと大事なり。

3　稲妻の当たり性息（生かし）の大事

稲妻の殺は胃、膽、食舎（食道）膀胱、肝この腑の間に性息止る。稲妻は上より九枚目の豁（肋骨）食舎の臓腑に当たる所にして、肝或いは膀胱を傷めて性息神父に止まるか、又食舎、膽、胃、脾を痛めて右肺を照し、後は大椎（背椎）より肺、心包絡を経て大椎四枚目雷公の間に性息あるべし。こゝを以って巡息の性息を修むべきなり。

（口伝）　稲妻の生かしは病人の左の手をとり、此方の左に巻込み、左の肘を病人の両乳の間に当て、右の手の腹にて背骨の七つを左の肘と一諸にもみ、もとの通りに寝す。両手にて病人の肩先より胸、腹にかけて四五へんさすりよせ、腹腰の骨無き所を両手にて三四へんもみ上げ、小もみ三べんにて活を入る。左の手を取り、俯向けに寝せ、両手にて一諸に三四へんさすり活を背より入る。松風の終りの通り起し、背の椎を叩くなり。

4　烏兎の当たり性息（生かし）の大事

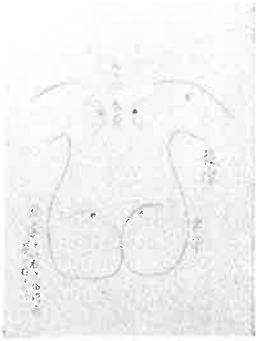
烏は左の眼心の経なり。これを殺す時は性息神父にこもる。五の椎を強く固め、竹管にて耳を強く吹き、性気を誘うべし。兎は右の眼心の経なり。これを殺す時も烏の時と同理なり。後を固め五の椎よりその者の人差指の先の節の寸を取り両方に開きて、その両端に針を一分半立つべし。薬の用ひ様又七ヶ所の活兼用すべき事大事なり。

（口伝）　烏兎の生かしは病人を仰向けに寝せ、左より掛り此方の右の手にて襟をとり、左の手を肩にかけ起す。右の膝へしかと病人をよりかゝらせ、此方の両手にて病人の乳の上と背の乳の裏を一諸に大もみ三べん小もみにもみ返す。右へもとの通りに寝せ、両乳の上よりだんだんさすりよせ活を入るゝなり。松風の通りに起こし、七の椎の事大事なり。

烏兎の当たりとは両眼を言う。右を月、左を日とし、右の兎左の烏その意を似って烏兎と言う。

5　独鈷の当たり性息（生かし）の大事

独鈷の性息は則腎性自からこの気に従い、五臓六腑の性を開き心気を明らかにする経なり。常に独鈷は音声を通して経絡を開き、この所を痛むる時は、性息身体に満ちながら性気を止むる事即座に験あり。斯くの如くなる時は、両の人差指を独鈷の日月（左右）に差し込み、暫く身体を固め



おき誘うべし。又七の椎に灸三火すゆべし。両手にて頭を固むべし。固めたる手にて琢磨を両手の親指にて強く固め、暫くして初寸雷公（五の椎の前後）をよく固め、前後左右共に誘うべし。暫くして酒を少し用うべし。露を用うれば気血巡りて心を開く、性息通りて後食を少しにても用うべき事肝要なり。いっさいの男女急死の時、生かして後徳宝丸或いは紅子圓或いは奇応丸其の他家伝の薬方を用うべし。釣鐘にも気をつくべし、又手の指を折る事前後の固め様並びに擽、枠立て、巻き立て柱、或いは気の誘い様に口伝多し。又四季によって身体の治様に大事あり。

（口伝）　独鈷の生かしは竹管にて耳を吹く。昼は右より吹き夜は左より吹くなり。病人を仰向きに寝せ馬乗りに乗り、耳の後を両指にて三四へんもみ、指を組合せ、病人をそのまゝにて少し起し、臂にて生かすなり。後は右に同じ。独鈷の生かしは相手の身体を仰向けに寝せ、我が両手にて琢磨をよくもみ立て、手の腹にて両方の耳根をしっかと固め、我が両手の臂にて胸を随分強く固むる事に口伝あり。気に向いて急に強く固むる事大事なり。生の後雷公の透し様に大事口伝あり。

6　琢磨の当たり性息（生かし）の大事

琢磨の生かしは病人を仰向きに寝せ、烏兎の通りに起し左に廻り、自分の膝へしっかと寄り掛らせ、背を三べん程打ち、下へなでさげ横腹より活を入れ生かすなり。左も右の通りに活を入るゝなり。終は右に同じ。

7　明星の当たり性息（生かし）の大事

明星の性息は前腎門の間大腸小腸の下段なり。即、腑は膀胱なり。この所を殺す時は即気経止って腎経即座に不巡するなり。性息は前豁六枚の間肝の臓と食腸の間にかくれ止る。又後にては腎の臓の下に風息あり、十六の椎に止る。これによって大便道小便道不巡して六根を悩す。後は腰の三椎をよくよくもみひねり万事に気をつけ、随分性をつけて大事に誘うべし。尤も下段の経に大事多し。性は神父に止って息は食腸の間に止る。これによってここをよく誘うべし。後は雷公の中心に止る故、こゝを固めて左右の豁、脇を固め誘うべき事なり。

明星の当たりにての死者は、生息中脘に大事あり。我が左の膝にてその人の五体を引き受けて（病人の身体を俯伏せにして膝に折りかける）押し上げ押し下ぐべし。神父と七の椎と同時に性息を強く透すべき事。時により小便留るその時は薬を用うべし。

（口伝）　明星の活かしは病人を仰向きに寝せ右よりかゝり肩先より両手にて次第次第になで下し、上に突き上げ腹腰の骨なき所を横にもむ。これは取り出し難し。上から病人を少し下し自分は後に廻り、右の膝に引き上げ下から上に逆活を入るゝなり。終りは前に同じなり。但し星は膀胱と臍を痛むるなり。

8　釣鐘の当たり性息（生かし）の大事

釣鐘の性息即両金を痛むる時は即座に体浮き上り、食舎、臍の風息止まって前は前豁十二枚の内に止る。これによって五臓六腑神父を悩し又六事甚だ多し。後は後豁上より七枚の膽の腑、胃の腑の上に止る。性息は六根を固め五体を直にして、少しも後にそらざるよう枠立てをして前後左右を即座に固むべきこと大事なり。五臓六腑を助けて手足の指を固め気をつけて誘うべし。腎命に当る所（灸所）に後より大灸三火、十八の椎の骨の所に灸七火すゆべし。前は臍に薬を置き大灸七火すゆべし。薬は灸を殺すに役あり、大事は枠立てにあり。

（口伝）　釣鐘の生かしは、病人はそり返る故足から首へかけて、あり合わせの紐にてからめ、そらぬようにして松風の活を入るゝなり。後は松風の活かしに同じ。但し容態むつかしくなり候時は綱を掛け（但し綱は首より足の丘に

かけず足の親指にかくるなり）。それより病人の後に廻り帯を締め、右の足にてしかと踏みつけ、病人の両手を自分の腹に廻し、手を組み合わせ後より前にしかと引き締め生かすなり。

9　七ヶ所の生かし

註　七ヶ所の生かしとは、松風（及び村雨）稲妻、烏兎、独鈷、琢磨、明星、釣鐘の七ヶ所の生かしを言う。七ヶ所の生かしを用いる時は、松風の生かしを施したる後、俯向きにして臍の裏の腰より活を入るる時を言うなり。又起こして肩先きより明星の活かしを入るゝ事に口伝あり。七ヶ所はこれなり一つ一つ入るゝにあらず。

（口伝）　当たりにより五体つる場合は、病人の両手を帯にはさませ、両足の親指を下に向けて折るべし。又爪ぎわより悪血を抜き去るべし。暫らくの間免ずべからず。又両足の三里の穴を堅く誘うべし。又両鐸を前に押し出すべし尤も根より押すなり。又前より取って臍へ引き上ぐべし。又腰の三椎に灸七火すゆべし。又後の雷公を強くもみ六根を誘うべし。神父を抱揉するに大事あり。心下（水月）に帯を巻くべし。後に気付薬を用うべし或いは生の米にても可なり。

四　治様（治療法）及び難死の活

1　難死の活（生かし）

(1)　雁下の当たり性息の大事

雁下の性息は膽の腑を通ってすべて神父に集り、神父の上に止まって胃と食腸と膽の三つの腑の中に性経を包み止まる。神父すこやかなる時これ皆気に通じ、雁下の性経の止まる所は、左前豁上より七枚目に当たる所に神父をかたどって経を包み止る。又後は左五枚目に当る所肺の臓に止る。性息の大事は前雁下を固め巡息を大事にさそい、食腸、肝、胃の三所

を上より下へなでさげ、神父と腎命の性息の意をうかがうべし。肝と胃と食腸とは前豁六枚目と七枚目の間に在り、肝は左の脇に廻り性をうくる。胃は右より左に廻りて脾の性をかりて性を請う。食腸も左七枚目と八枚目の間に水道あり。何れもこの所を大切に透すべし。皆雁下に性息集る所なり。大事は修力を以って以心伝心に通用すべし。

(2) 月影の当たり性息の大事

月影の当たりは上より左十枚目の豁骨はずる。これをさそうには経絡を以って透すべし。経絡は常に巡環するなり。又後は大椎の六椎七椎に気腑、心の臓あり。この所を大切にして下段の腎命の所に気をつくべし。何れも五臓六腑を助くる腑なる故大事に守るべし。

(3) 水月の当たり性息の大事

水月の性息は五臓の性気の生ずる性息、即天地の理の意義を現わすものに形どった三集（膀胱）と、五臓六腑の根元を現わす神父の腑の性息此れ水月の性息なり。陰陽の和、天地の中、人間の中脘に定る性息の事なり。前豁八枚目に当たる鳩尾先なり、星光と日月の間、温水と寒水この間に巡息止まるべし。これによって経絡止まって巡環する事なり難し。性息は六根六腑を助け、五体五臓を透すべし。初寸、前豁、肺三所の経絡なり。初寸は心包絡に止まる所なり。万事経絡の誘いに口伝あり、大事なり。後は左右の雷公及び十四の椎に当たる所腎経に風息を透すべし。これにより水月の死所は大事なり。萬の性息を透すに萬の理あり。口伝この透すに大事多し。

(4) 十二経水巡絡の事

足少陰経	足少陰絡	手厥陰絡	手少陽経
足厥陰経	足少陽経	手少陽絡	手厥陰絡
足少陽絡	足厥陰経	手大陽経	手大陰経
手陽明経	手陽明絡	足陽明絡	足大陽経

足陽明経　手少陰経　足大陽絡　足大陰絡
手小陰絡　手大陽経　足大陽経　足大陰経
海水　清水　謂水　胡水　洪水　汝水　江水　准水　溜水　河水　漳水　濟水

右経絡不巡にして急死、急蘇の為に経絡数万之理を口傳する者なり。委細大事は師傳に有り。

註　経水とは体液即血液（動脈と静脈）淋巴と解される。従って経絡は体液の通る通路即血管（大血管、小血管）及び淋巴管等と解され、十二経水は手、足、頭、胴体等を指すものと思われる。

註　七ヶ所の生かしに対して雁下、月影、水月の生かしは特に困難な生かしとして別個に区別されている。

2　治様（治療法）

(1)　水死（溺死）性息（手当）の大事

水死の活かしは常に囲炉裏の灰を紙袋に入れ、一桝ばかり人知れず持ち行くなり。それより病人にかゝり頭より足先まで総身によく灰を塗り、その間に水を出し腹を見るなり。それより更に右の通り灰をよく塗り、生かしは稲妻を用ゆるなり。療治相済み病人の灰をよく洗い落し親類へ渡すなり。

水溺の死者は水より引き上ぐる際に大事あり。先ず水より上ぐる際に男は陰の方を下に、陽の方を上に身体を直すべし。次に全身に印を付す（印の模様は省略）。又水を吐かすに大事あり。胴を抱え臍を柔らかにもみ誘うべし。水より上ぐる時に、足よりさかさに引き上げ水を出す事に大事あり。水自らら吐き少しにても性息あらば塩水を鼻口に急に入るゝべし、後で飲ますべし。又次第次第に臍をもむべし。後に褌を強くもむべし。又後にて臍を竹管にて吹くべし。性息の大事は神父にあり。水に溺らされたる者も右に同じ。水を吐かし印を付すの大事も右に同じ。更に活を入れて左右に火をもやす。紫の明ばんの細粉を病人の口中に入れおくべし、暫くして蘇生す。溺らされたる者水より上ぐる時、急に水の椽を切らず

水を放しかくる事に大事あり。水の中にて病人を逆さにして大事に抱え上ぐべし。併せて水より引ぐるよう口伝あり。水の椽ある内に耳に冷水を入るべし。又於頭に百会の穴（肛門をさす）を強く打つべし。額に生汗あり、立ちどころにその功を得ること神の如し。

(2) 怪我、揮死性息（手当）の大事

怪我により揮死の人あり。是は性息あり。先ず後方に寄り両の脇の下より我が両手を差し廻し、病人の塚磨を強く固む。前豁八枚目に帯の大事あり。帯をしつかと締むべし。又心下臍下の大事あり。豁の押端と帯とに口伝あり。

（口伝） 松風の生かしを用ふるなり。

懐妊の女怪我致し候節は、右塚磨の生かしを用ゆるなり。注意は五の椎の事。

(3) 縊死（首くゝり死）性息（手当）の大事

縊死によって経絡絶したる者、性息をおこすには七ヶ所の生かしを用ふる事大事なり。後門（肛門）不援の大事、真綿の大事、鼻照息管の大事の施し方前にあり。神父雷公を固め助け、或いは胸を温め性息の風を誘うべし。又背の三椎に大灸三火、心経に七火すゆべし。後、口に急に水を吹き入れ暫くの間五臓六根を誘うべし。但し灸の艾に口伝あり。抱揉の大事前にあり。

（口伝） 首くゝりで死にたる者の生かしは七ヶ所の生かしを松風より釣鐘まで残らず用ゆる。（真綿なども少々懐中候事）尤、村雨よりあと明星まで施し終る。但し肛門の事、管にて耳を吹く事に大事あり。

(4) 乱息死性息（手当）の大事

乱息というは臓の乱れを言うなり。先ず病人の帯を解き脇の下より肩にかけ、両乳の上を十文字にしっかりとくゝり、それより稲妻か明星、釣鐘の活を入るゝなり。終は右同様なり。くゝる時は病人の帯を用うるなり。もてあますに及ばず。息切れて死する者あり。尤息切れて死ぬを息乱れて死すると伝ふ事あり。横死横難の時性息の固め様に大事あり。乱と言

うは急ぎ道を行く時出る病なり。動気激しき時、或いは身体の前後を強く打つ時、或いは悪気毒気に当てらるゝ、或いは悪風により吐血す、又強痰を吐く病による、これ皆乱息の性なり。

性息を活かすべき大事は、左肩より右の肩、又髆四枚目のあたりに綿攣を十文字に固むること、背も同様に固むること、大事は両の肩を強く固め性息の風を誘う。誘うにその功を見ざれば則八椎七椎に大灸三火すゆべし。艾の掛目は口伝あり。活を用いて後に白湯（冷水にてもよし）を用うべし。後に乙両の初寸をよく誘うべし。

（口伝）　五臓の乱れ又は血を吐きたるか、遠道にて疲れ死にたるをいうなり。これは間に合わせの綱にて身体をしっかと固め生かすなり。

(5)　毒に当たり神父破る性息（手当）の大事

毒害にあいたる病人、或いは血を吐きたる時は、とくとよく見定め、いよいよ毒にてはずろうときは、又何事なくはずらいて血等吐きたるは生きず。病人の両足の親指の爪の上の角を針又は小刀等を用いて四五分ばかり突立て、血少しにても出で候へば本性気のつくなり。

毒身体に入りて一身悉く病み死して一時までは身焼くる。一時を過ぎて蘇生せざる時は腰より下を塩湯にて温むべし。両足の親指先より悪血を抜き去るべし。

又血も抜くなり、ぬれ手ぬぐいにて額と一の椎を冷やすこと第一なり。左よりかゝり左の手にて病人の乳を押へ、右の手にて病人の右の乳を五度ほどよくもみ、又病人の右より乳を一ぺんに大もみにもむ。又もんで上に突き上げ、それより細腰を四五へん真上に引きよせ、又病人を起こし自分の左膝に引きよせ、更に乳の上より押し下げ生かすなり。

（口伝）　毒抜き法は足の親指先に針か小柄を突立て、血少しにても出る時は毒抜くるなり。

(6)　急死性息（手当）の大事

常に痰多く出る病性の人の急死、又号病で急死する時なり。病性は第一に臓腑の上脘責め上り、又背は三椎より七椎の間

に悪血を止め、息腑（呼吸器）心経を痛め気経止む死なり。雷公に灸をすゆべし。又肩壁より針を以って血を抜くべき事大事なり。水月を左右より固むる事に大事あり。灸を用ふべき事（但し五火）艾かけ目は口伝。又両の手足の甲より血を少し抜くべし。又陰陽の理を以って昼は右耳を竹管を持ってこれを吹くべし。尤も左の耳をふさぐ事。夜は左耳を吹き右の耳をふさぐ、これは陰陽の理なり。

（口伝）　早風邪又は頓死等にての死を言い、これは七ヶ所の生かしを用ふるなり。

(7)　経死人性息（手当）の大事

湯に入るとき経絶する事あり。湯に入り死したる者に急に水を用ふるべからず。僅かに水を用ふる事は最も悪しき事なると心得べし。病人を大事に扱うこと、寝起きに念を入るべき事第一なり。抱えて下に置く即急に置くべからず、急に置かば即座に性息滅するなり。病人一人を四人或いは五人にて寝かせ又起すべし。尤も右病人の下に塩を少し置くべし。又ロに××湯を用ふべし。又両の初寸の間を温湯にて温むべし。後にて水を飲ますべし。尤も少し気付けを用う、これは水より後に用ふべし。又暫くあって背の五の椎に大事あり。

（口伝）　生かしは松風にてよろし、但し早く水を用ふるにあらず。

(8)　寒之死性息（手当）の大事

寒之死の者の経絡は五臓に留まって死す。一時の間までは神父冷えず、一時の間を過ぎて神父滅るなり。活かすには管の伝を用ふべし（これは前に同じ）。次に両足及び水月より明星の間を早く温むべし。又初寸の間も温湯にて温むべし。次に湿気をよく取り去って熱灰を布に包み臍の上を温むべし。背は三椎より七椎まで温めて湯を三口ほど飲ますべし。蘇生後は速刻粥を温め喰はすべし。尤も管は一息吹くべし。

（口伝）　手足の親指をしかと巻くなり、寒え死なず。但し酒を顔に吹くなり。道中ならば小便を膀胱に早くしかくべし。

3　死活極秘口伝

(1)　殺境の事

絞めて暫くすると殺境来る、先ず目玉を返すなり。やがて右の足か左の足をこするなり。一つこする時許すべきなり。両手の指をひくひくする時も許すべきなり。許すには少しずつ力を抜き許すなり。仕方に口伝あり。

(2)　殺境放し様の事

随分静かに取扱い、随分かくりと言はぬように放つ（許す）。少しにてもかくりとなれば、吐息と言うもの来りて気抜くる故生きず。仕方に口伝あり。

(3)　毒薬

毒薬の第一と言うは、ひそうせきに鬼あざみの花、はんしょう、蛇のから（調合に口伝あり）。実は口にくわえさせ、目のふち、口のへんに塗るなり。毒抜く時は生姜を用ゆるなり。用い様は甚だむつかしきなり。口伝あり。

註

(イ)　三椎と言うは十八の椎の事なり。都合二十一あり。十四までは動くなり。

(ロ)　腰の三椎と言うは、下帯を締むる所なり。下より四つ目上より十八の所なり。

(ハ)　腹に上中下脘あり。水月より臍の上までなり。

(ニ)　初寸、雷公は十一の椎の裏表を言うなり。

(ホ)　水月と月影の二ケ所の当たりは、極く軽きときも生くるに極々むつかしきなり。

(ヘ)　三所の大事と言うは烏兎、明星、釣鐘を言うなり。

(ト)　三集は膀胱なり。